

博士學位論文審査要旨

2015年7月15日

論文題目：日本近代における〈デカダンス〉の文学史的研究
——明治三〇年代—昭和二〇年代、〈否定性〉の系譜学——

学位申請者：福岡弘彬

審査委員：

主査：文学研究科 教授 田中勲儀

副査：文学研究科 教授 西川貴子

副査：文学研究科 教授 石井久雄

要旨：

本論文は、日本の近代における〈デカダンス〉概念の多様な在り方とその可能性を掘り起こすことで、同概念を中心とした文学史の再編成をめざしたものである。考察の対象は、〈デカダンス〉を理念化し自身の文学活動と関係させた、岩野泡鳴・平林初之輔・保田與重郎・坂口安吾。四作家・評論家を捉えるに際し、〈デカダンス〉概念を貫く〈否定性〉を媒介とした。

第一章・第二章では、明治40年代に岩野泡鳴が唱えた「デカダン」概念について、評論『新自然主義』と小説『耽溺』を対象として詳説する。〈言葉〉と〈物〉が分離した〈表象の秩序〉崩壊後を生きる泡鳴を、あらゆる二元論の破砕という点でラディカルな「デカダン」と位置づけた。理論の実践としての『耽溺』について、「刹那主義」を体現する「僕」が代替可能性の論理の上で芸者との同一化／変成を繰り返すなどと考察し、その限界にも言及したが、〈恋〉の終焉を芸者の性病に帰するなど、男性の視点から見た「デカダン」の問題に切り込む必要もあった。

第三章では、マルクス主義文学の圏域で〈デカダンス〉問題に取り組んだ平林初之輔の変転を考察した。初期には文壇を破壊する起爆剤として「デカダン」を捉えていた平林は、マルクス主義との邂逅によって「衰退」する階級の「頹廢」として否定。左翼運動から身を引いた後は「芸術的価値論争」の中でふたたび「頹廢」の魅力語る。「頹廢」に潜勢力を見出す平林の特異な姿を明らかにした功績は大きい。大正期の思想・社会状況との関わりを、さらに追究したい。

第四章では、昭和10年代に文壇を騒がせた「デカダンス論争」について、保田與重郎に焦点を当て、その目論見と失敗の軌跡を追う。保田は、自分たちの世代がポスト・マルクス主義を担うことを「デカダンツ」の語によって宣言したが、難解な表現も災いして周辺理解を得られず、「頹廢」や「虚無」の問題へと回収されてしまう。

第五章から第七章では、戦後発表された坂口安吾の評論『墮落論』『デカダン文学論』および小説『いつこへ』を対象として、その内容を詳説する。〈戦争責任〉追及の中で産出される〈主体〉について、また、〈観念—肉体〉の統一〈責任〉を持つ〈主体〉について、安吾の評論での展開を追い、実作への反映を検討する。戦時下における保田との邂逅も意義深い指摘である。

保田の評論活動に顕著な〈デカダンス〉と〈ナショナリズム〉との関係などに考察の余地を残すが、明治から戦後に至る新たな〈文学史〉を構想し展開した力量は評価に価する。よって、本論文は、博士(国文学)(同志社大学)の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2015年7月15日

論文題目：日本近代における〈デカダンス〉の文学史的研究
——明治三〇年代—昭和二〇年代、〈否定性〉の系譜学——

学位申請者：福岡弘彬

審査委員：

主査：文学研究科 教授 田中励儀

副査：文学研究科 教授 西川貴子

副査：文学研究科 教授 石井久雄

要 旨：

上記審査委員3名は、2015年7月7日、午後7時から約2時間にわたり、徳照館第一共同利用室において、公開で学位申請者に対して口頭試問をおこなった。

学位申請者は、審査員からの質疑に対して、提出論文についての専門的知識はもとより、関連する諸分野の事柄に関しても、的確かつ詳細な応答をおこなった。その結果、本論文の学術的価値の高さ、および学術水準の高さが確認された。

また、語学（英語およびドイツ語）についても、十分な理解力と運用能力、および表現力があることが認められた。

よって、総合試験の結果は合格と認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 日本近代における〈デカダンス〉の文学史的研究
——明治三〇年代—昭和二〇年代、〈否定性〉の系譜学——

氏名： 福岡 弘彬

要旨：

日本近代文学において〈デカダンス〉の概念は、幾度も理念として提唱されてきた。だが現在、〈デカダンス〉は作家の生そのものの内部に埋め込まれ、問題化されることがほとんどない。本稿は、現在まで忘却されて久しい、日本近代における〈デカダンス〉概念の多様な在り方と、その可能性を掘り起こすことで、同概念を中心化した文学史を編み上げることが目的とする。考察する対象は、岩野泡鳴・平林初之輔・保田與重郎・坂口安吾、〈デカダンス〉を理念化し、自らの文学営為と関係させた以上の四作家である。

時代も文学的立場も隔たった彼らが唱える〈デカダンス〉は、保田と安吾を除いて直接的な影響関係は特に認められず、時代的な意義も異なっているが、本稿は、四作家の〈デカダンス〉概念を貫く〈否定性〉を、研究における補助線とする。概念移入期である明治三〇年代から既に用意されていた、忌避すべき現象として〈デカダンス〉を捉える視線は、現在でも残存している。同概念を退けることによって、人は〈デカダンス〉を糾弾するとともに、自らの正常さを担保する。ならば批判の反復とは、倫理的・社会的規範がセキュリティを強化する構造でもある。〈デカダンス〉を弾き出そうとするこのようなセキュリティが作動する中で、もしその概念が理念化されるならば、そこには必ず〈デカダンス〉を排除しようとする視座が拠って立つ諸規範に対して、葛藤—抗争が生じている。単に既存の制度を追認するならば、〈デカダンス〉が敢えて掲げられる必要はないのだ。本稿では、理念化されたそれぞれの〈デカダンス〉が、諸規範に対して否認を差し向けるその瞬間を、〈否定性〉と呼び、この一つの指針を頼りに、各作家が唱えた、あるいは小説として実践された〈デカダンス〉の意味とともに、射程となっている諸規範を復元した。その葛藤—抗争の諸相を明らかにすることで、〈デカダンス〉が抱え込む可能性を浮き彫りにする。

第一章では、岩野泡鳴の唱えた「デカダン」概念について、『新自然主義』（明治41・10、日高有倫堂）を中心に彼の評論を考察し、同概念が同時代における道徳的、文学的規範と葛藤する様態を明らかにする。〈言葉〉と〈物〉の紐帯が瓦解した、〈表象の秩序〉崩壊後を生きる泡鳴は、あらゆる二元論の破碎を企てるという点で、最もラディカルな「デカダン」として位置付けられる。また、泡鳴が「自我独存」の延長上に導き出した表現論は、同時代の文学者たちが「象徴」の語によって超越性を志向する中で、流動的な「自我」を「刹那」の連続として表す体系を構築しようとしていた。しかし彼の評論は、言語への内省の不在、コミュニケーションの予めの放棄という問題を抱えており、「デカダン」は閉域を形成してしまう。「デカダン」概念によって、当時において非常に尖鋭的な文学理論を紡ぎ上げようとする泡鳴の姿と、その言葉の抱えている限界性を検討した。

この分析を踏まえて、第二章では、泡鳴による「デカダン」の小説実践として、『耽溺』（「新小説」明42・2）を分析する。この作品の持つ〈否定性〉は、主人公の「僕」＝田村義雄の存在様式として顕れる。めまぐるしく情動を変化させることで「刹那主義」を体現する「僕」は、代替可能性の論理の上で芸者吉弥との同一化／変成を繰り返す。「デカダン」としての「過敏」な「神経」を「誇り」とし、自身の輪郭を積極的に壊していく彼は、〈反近代〉的な諸相を自己の内部に保持するだろう。だが、自らの流動化を加速させる「僕」は、「耽溺」への飽くなき追求

の中で、欲望—快樂の循環という限界に陥ってしまう。ここでは「デカダン」にまつわる当時の言説も参照しつつ、そのリミットの時代的共約性も併せて分析した。

第三章では、マルクス主義文学の圏域で〈デカダンス〉の問題を考察した希有な人物、平林初之輔が中心化される。初期には文壇の現状を破壊する起爆剤として「デカダン」を捉えていた平林は、マルクス主義との邂逅により、同概念を「衰退」する階級の「頹廢」として否定するようになる。だがその後、運動の前線から退いた平林は、「芸術的価値論争」の中で、「頹廢」の魅力を唱え、糾弾されるに至る。〈デカダンス〉が排除されるべきものとしての地位に追いやられる大きな契機となったマルクス主義運動が、「頹廢」に対する批判をいかなる論理で遂行するかを並行して整理しつつ、「頹廢」に〈潜勢力〉を感知する特異な平林の姿を明らかにする。

第四章では、昭和一〇年から一一年の間、文壇を騒がせた「デカダンス」問題について、保田與重郎を焦点に文脈を発掘—再構成し、彼の目論みとその失敗(=「デカダン論争」)を追う。「論争」の始め、保田は「主題の積極性について(又は文学の曖昧さ)」「(日本浪漫派) 昭10・10」で、自分たちがポスト・マルクス主義を担うことを「デカデンツ」の語によって宣言し、前代の終局を告げた。さらに、この語に〈余白〉を維持することで、「文学」と「僕ら」の居場所を確保しようとする保田であったが、彼が作ろうとした共同体の内からも、その外からも、「デカデンツ」は罅を入れられ、解体されてしまう。保田が提唱した「デカデンツ」が、文壇からほとんど相手にされないまま「頹廢」や「虚無」の問題へと回収されていくその動態を復元することは、〈デカダンス〉の可能性が閉じられていく過程の、現在にも連なる一つのモデルを示すことにもなるだろう。ただし、「論争」の最中、「デカダンス」に新たな「モラル」の母胎としての可能性が見出されている。その力動性をこの時点で坂口安吾が察知していることは、以降の章にもつながる重要な点である。

第五章では、坂口安吾「墮落論」(「新潮」昭21・4)を、戦後の壊滅的状况における混乱を伴った言語行為として捉え、そこで「墮落」という言葉がどのように繰り出されるかを考察している。「歴史」や「運命」に抗いつつも、空襲の圧倒的な「美」の記憶に取り憑かれている「私」は、その記憶の中心で、「墮落」の言葉を手繰り寄せる。それは、「デカダン論争」以降の保田與重郎が戦時中に、死に逝く者たちの姿の美しさを抽出し、「運命」を自然化した、「デカダンス」の美学との葛藤—抗争を伴う所作であった。「デカダンス」の可能性を戦前から感知していた安吾は、保田の「デカダンス」から「墮落」を奪還し、眼前に広がる「墮落」を未決の未来を切り開く〈否定性〉として抱え込み、戦後を歩き始める。

第六章は、安吾がさらに具体的に「墮落」=「デカダンス」によって〈否定性〉を発揮していく様を、「デカダン文学論」(「新潮」昭21・10)を分析することで明らかにする。「デカダンス」によってあらゆる「型」を否定しようとする同論が、当時における「デカダンス」や「デカダンス文学」に関する言説にはない独自性を持つこと、雑誌「近代文学」に対して批評性を有することが確認される。さらに、安吾の唱える「デカダンス」が、本稿で考察する〈デカダンス〉と、複層的に連絡することを示している。それは、坂口安吾の生そのものの問題として「デカダンス」を捉える視座から、同概念を解放するだろう。

続く第七章では、安吾の「デカダンス」理論の実践である、小説「いづこへ」(「新小説」昭21・10)を、発表時の〈責任〉と〈主体〉を巡る二つの問題に接続し、読解する。問題系の一つは〈戦争責任〉追及の中で産出される〈主体〉について、一つは〈観念—肉体〉の統一〈責任〉を持つ〈主体〉についてである。双方が文学者各々に〈主体〉の統御を迫り、〈自己根拠化〉を強いる際に不可視化してしまう〈主体〉の領域を、〈自我探究〉を主題とした当作品は、「私」のズレや複数化によって導出している。さらに、作品内外における「賭け」の営為は、自らではない〈他なるもの〉を〈主体〉に呼び込むことで、自己完結的な〈責任—主体〉論理に、再考を促すだろう。本当の「墮落」に辿り着けない「私」の存在様式こそが確保する可能性を、ここでは明らかにしたい。

補章では、第二章と第七章の考察を踏まえて、岩野泡鳴『耽溺』と坂口安吾「いづこへ」を改めて並置し、通底する〈デカダンス〉を析出した。両作家の〈デカダンス〉実践として創作された二つの小説は、無視できない様々な共通点を有している。今一度、それらを確認することにより、両作品を、日本近代文学における〈デカダンス〉小説として記憶し直すことを提言した。

以上の考察を通じて、本稿では〈デカダンス〉の文学史構築を企図している。評論や文学理論、論争、小説、様々な対象を考察しながら、多様な〈デカダンス〉の在り方と、忘却されたその可能性を掘り起こす。

最後に、ここで試みる文学史は、系譜学として記述される。すなわち、直接的な影響関係を遡及して垂直的なセリーや「起源」を探求するのではなく、「起こったことをそれに固有の散乱状態のうちに保つこと」であり、「われわれが認識するものおよび、われわれがそれであるところのもの根にあるのは、真理と存在ではなくて、偶発事の外在性であるのを発見することである」

(ミシェル・フーコー、伊藤滉訳「ニーチェ、系譜学、歴史」、小林康夫他編『フーコー・コレクション3』平18・7、筑摩書房)。西洋からの移入概念である〈デカダンス〉を、比較文学的な手法を採らずに分析し、発表された当時の文脈の中に置き直して考察したことも、このことに拠る。「われわれ」の現在の〈デカダンス〉観を追認するような「根」ではなく、認識を揺るがす「偶発事の外在性」を見逃さずに、過去の〈デカダンス〉と出会い直したい。その中で、〈否定性〉という点をつなぐ文学史を浮上させ、既存の文学史を更新することを、本稿は企図している。